

# What's News Literacy?

早稲田大学 × 読売新聞社 プロフェッショナルズ・ワークショップ



## 早稲田大の学生15人 読売新聞社に提言

早稲田大学と読売新聞が連携して2022年秋に実施した課外教育プログラム「プロフェッショナルズ・ワークショップ」(プロプロ)は、「ニュース・リテラシーを広めるには？」のテーマについて学生15人がグループワークで議論を深め、読売新聞社への提言をまとめた。

ワークショップの期間は10月中旬から12月中旬にかけての約2か月間。5人ずつ3グループに分かれた学生たちは毎週火曜日の夕方、東京・西早稲田の早稲田キャンパス3号館の教室に集まり、提言に盛り込む内容を話し合った。この間、ニュース・リテラシーについての模擬授業で小中学生の気持ちになって話を聞いたり、NHKでメディア情報リテラシーの番組に携わっている大橋拓さんに記者として取材したり、様々な立場・視点からアプローチした。

「そもそも、ニュースってなに?」「リテラシー教育のターゲットはどんな世代?」「子どもたちに興味を持ってもらうには?」など次々と質問や疑問が出て、教室だけでなくインターネットのチャットでも熱心にやり取りを重ねた。

### ニュース・リテラシー

正確で信頼できるニュースを見分け、正しく読み解く力のこと。インターネットとソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の普及で、だれもが簡単に情報を発信することが可能になり、偏った情報や極端な意見が出回ったり、フェイクニュースが拡散したりといった動きが加速している。ニュースを活用できる能力を養うことが必要になっている。

読売新聞社では、子どもたちにニュース・リテラシーを身につけてもらうため、小中学校や高校でモデル授業を試み、教室で活用できる教材の開発にあたっている。さらにどんな取り組みを進めればいいのか、早稲田大学の学生に提言を求めた。

### 早稲田大学プロフェッショナルズ・ワークショップ

企業や社会が抱える課題の解決策を、学生チームが連携先の企業に直接提案する課題解決型のワークショップ。プロフェッショナルズ(企業人)の指導や監修のもと、学部・学年を超えて集う学生同士がグループワークでの議論を通して考える。



## ニュース・リテラシー なぜ必要?

読売新聞東京本社（東京・大手町）で行われたワークショップ。鈴木美潮記者が「なぜニュース・リテラシーが必要か」について説明し「情報があふれかえる時代において求められているのは、情報収集能力ではなく、情報を吟味し、正しい情報を見分ける能力」と話し、「選『情報』眼を養うために、新聞は有効なメディア」と強調した。

続いて15人は編集局を見学。「どうやって紙面に掲載するニュースを決めているのですか」「このフロアではどんな役割の人が仕事をしているのですか」などと質問。原稿の誤りをチェックする校閲部という専門部署があることを鈴木記者から聞いて、驚いた様子だった。



## ニュースや情報 どう活用?

鈴木記者の話聞いて、ニュース・リテラシーの輪郭は何となくつかめたが、まだイメージは浮かばない。提言に向けての議論を進めるながら、15人はニュース・リテラシー教育(NLE)の模擬授業に臨んだ。先生役は読売新聞教育ネットワークの田中孝宏・アドバイザー。長く東京都内の公立小学校長を務めた田中アドバイザーは、小中高校の児童生徒を対象にNLEの授業を行っている。

「情報って何だろう」「ニュースって何だろう」「この二つはどう違うの?」田中アドバイザーが次々に繰り出す質問に、15人は懸命に答えを探る。「受け取ったニュースや情報を、どうやって活用するかを考えよう」「とにかくみんなで話し合うこと。これが一番大事」  
答えがない授業だからこそ、考え抜き、話し合うことが重要だと訴える田中アドバイザー。その言葉に深くうなづく。

## NHKの大橋拓さんに取材

取材も体験した。NHKで「つながる! NHKメディア・リテラシー教室」の運営に携わっている大橋拓さんを招き、質問を浴びせた。

大橋さんはアナウンサーとしてNHKに入局。米国の大学に派遣されて研究し、帰国後にメディア・リテラシー教室の発足に参加した。教室は、全国の小学5、6年生がオンラインで意見を交わしたり、発表したりしながらメディア・リテラシーを楽しく身につけてもらうことを目指している。

「リテラシーを子どもたちと考えるときに難しいことは?」「解決したい課題は?」などの質問に大橋さんは「正解がないということ、子どもたちや先生に理解してもらうのが難しい」「メディア・リテラシー教室を続け、どうひろげていくかが課題だ」などと答えた。



### 3チームが提言発表

3チームは、読売新聞社への提言をスライド18～25枚にまとめ、12月に発表した。早稲田大学の伊藤達哉・教務部事務部長、荻原里砂・教務部教育連携課長、読売新聞東京本社の東武雄・教育ネットワーク事務局長が見守るなか、ニュース・リテラシーを普及させるための方策を説明。それぞれ課題を明確に指摘したうえで、具体的なアイデアを披露した。

上・中：メンバーから出た意見をホワイトボードに書き出し、さらに議論を重ねる  
下：提言発表を聞く伊藤事務部長（右）と東事務局長（左）



### 提言

## 小学校4～6年生のニュース・リテラシーを高めるために、読売新聞オンラインにエデュテインメントのコンテンツを取り入れるべきだ

**Team B**  
キンコイチーム  
岡谷侑晟、石橋亜莉  
梅原舞、八巻悠  
吉田るな



**概要** 「エデュテインメント」は、エンターテインメントとエデュケーションを融合した言葉。学校での授業は一過性になりがちで、講師の数が少なく、実施できる学校が限られている。ゲーム性を取り入れたアプリを開発し、クイズに答えたり、動画を見たりして、手軽にニュース・リテラシーを身につけることができるようにする。継続してニュース・リテラシーを考えることになり、定着も図れる。クイズは、様々なニュースの真偽や、過去のフェイクニュースを見て、危険性やあやしい部分をこたえてもらう。

### 提言

## 子どもと親のニュース・リテラシーを高めるために、昔話を今までと違った視点で見る教材を用意すべきだ

**Team A**  
ぞう組さんチーム  
阿部晶太郎、大城伊織  
倉田友美、世羅雪月  
田野紘那

**概要** 対象に保護者を加えることで、子どもと一緒に考えてもらったり、内容が難しいところをサポートしてもらったりすることが可能になる。ニュース・リテラシーの講義を受けた大学生が授業を行う形にして、新聞社が講師を派遣するよりも多くの人にアプローチできるようにする。昔ばなしの教材としては、小学生にもなじみ深い「赤ずきんちゃん」を取り上げる。新聞、テレビのリポーター、SNSの情報発信を比較し、多様な観点から情報を吟味する力を身につけてもらう。



### 提言

## 高校生のニュース・リテラシーを高めるために、寝ない！ 将来使える！ 継続型の教室を作るべきだ

**Team C**  
Yingチーム  
平塚絢子、青柳孝信  
沈意境、上野詩織  
小野彩夏

**概要** 高校生の中には、授業でニュース・リテラシーを扱っているが、情報の入手はテレビやネットで十分と思っている人もいる。過去の事例をもとに、「正しいニュース」かどうか、ゲーム形式で気づいてもらう。また、新聞・テレビ・ツイッター・ラインなどの信頼度を点数化して比較し、議論する。新聞記事を読み解き、意見をまとめ、話し合う。記事を選んだり、ディスカッションをしたりすることで能動的に関わることになり、眠くならない。紙の新聞に親しむことで高校生の新聞への抵抗感を減らすことにもつながる。



## プロプロに参加した皆さんの感想

※学部・学年は2022年度当時

### 現場の皮膚感覚学べた

阿部 晶太郎 (教育学部1年) [Shoutarou Abe](#)



私はこの活動の中で苦しくなるほど考え続ける経験をした。時にはそれが良いアイデアに結びつき、別な時にはただ悩みが膨らんでしまうこともあった。ただこの経験は普段の勉強や作業では経験できない貴重なものであったと感じている。今回のプログラムでは読売新聞の現役の記者の方とお話する機会が多く、現場の皮膚感覚を学ぶことができた。学年と学部がバラバラなメンバーと一緒にプロジェクトを立案するというのは思っていた以上に大変だった、最後「発表」というところまで走り切った時には達成感があった。今回学んだことを生かしつつ新聞記者という夢に邁進していきたいと思っている。

### 自分の課題 社会人の観点から発見

世羅 雪月 (文化構想学部2年) [Yuzuki Sera](#)



今回、早稲田大学のプロフェッショナルズ・ワークショップに参加し、チーム単位での活動と社会人と接する機会を持つことができ非常に有意義な経験になった。チーム単位での活動においては、異なる背景や専門分野を持つメンバーとの議論を重ねることで自分の視野を広げることができた。またメディア業界で働くプロフェッショナルの方々から都度フィードバックをいただくことで、自分の課題点や成長すべき点を社会人の観点から見つけることができた。こうした経験を今後のキャリアや人生において生かしていきたいと思う。

### 答えのない課題考え抜いた

倉田 友美 (法学部3年) [Yumi Kurata](#)



情報は日常にあふれている。しかし、正しい情報の見分け方を知る機会は少なく、私自身の理解も浅かった。ニュース・リテラシーを学ぶだけでなく、どう広げるといふ答えのない課題に対して頭が痛くなるほど考えた2か月間だった。提言を考える中では、グループで意見をまとめる困難さを痛感した。さらに、グループで議論を重ねて作成した原稿も修正点が多くあり、提言の「具体性」や「実現性」の追求に苦戦した。実際にニュース・リテラシーの活動をされている方々の生の声を聞きながら、様々な活動ができたことは今後にも役立つ貴重な機会だった。

### 意見の違い 目的を意識して解決

大城 伊織 (教育学部3年) [lori ooshiro](#)



ワークショップを通してニュース・リテラシーを理解することとチームビルディングを達成することができた。普段、新聞を読む中で学ぶことができなかった公平性や信頼性を理解し、新聞という媒体がいかに重要かを再認識する機会になった。また、ニュース・リテラシーの意味の範囲が広く、グループ内での意見の食い違いもあった。しかし、定義づけに戻ることで、同じ方向に向かうことを意識し、解決できた。この貴重な経験を生かし、情報を吟味する力であるニュース・リテラシーを意識していきたい。

### 苦勞したからこそその成長

吉田 るな (文化構想学部1年) [Runa Yoshida](#)



今回のプロフェッショナルズ・ワークショップを通して、不確かな事象に対して自分たちなりのアプローチを考えていくことの難しさを痛感した。ニュース・リテラシーは明確な定義がないため、目指すべき状態の設定から他者と意見を共有しながら行うことが難点でありながら醍醐味でもあったと思う。考えていることを明確に言葉にしながら、それらに説得力を持たせていく。この過程で最も苦勞したからこそ、一番成長できたと感じている。チームメイトとディスカッションを重ねる中で多くの刺激を受けた時間だった。

### 議論重ねてワンチームに

八巻 悠 (政治経済学部2年) [Yu Yamaki](#)



ニュース・リテラシーは、確立した概念ではなく、定義が曖昧な概念だった。そのため、自分たちの中でどのように定義するのかという議論に非常に時間がかかり、迷走していた時期もあった。しかし、2か月間共に同じ課題に向き合うチームメイトとたくさんの議論を重ねることで一つのチームとしてまとまり、駆け抜けることができたと思う。本気で課題に向き合った充実の2か月間だった。ありがとうございました。

### 自分の役割見つけて課題に向き合う

梅原 舞 (教育学部3年) [Mai Umehara](#)



頭から煙が出るほど考え抜いた2か月間だった。グループワークでは、新規性と実現性の両立や、意見の集約が容易ではなく、全員が考え込む場面もあった。加えて、自分の考えを言語化することの難しさも痛感した。しかし、チームの中に強みを生かせる自分の役割を見つけることができ、一つの課題に徹底的に向き合う大変さと楽しさも知ることができた。連日話し合いを重ねて臨んだ最終報告会の後、達成感と同時に「もっと考えたい」という思いも抱くほどであったという間で、かつ、チーム内の結束が強まる濃密な日々だった。

## 自分と向き合い続ける日々

石橋 亜莉 (文学部3年)

Ari Ishibashi



今回のワークショップを通じて、ニュース・リテラシーの重要性を実感するとともに、広めていくことの課題が山積みであることを感じた。また期間中は様々な方のお話や思いを聞き、チームの中で議論をしながら常に「私のニュースや情報への向き合い方は正しいものか」と自分と向き合い続ける日々になった。この経験を通してニュース・リテラシーの重要性を自分ごととして「実感」することができたため、これからはこのような「実感」をより多くの人に持ってもらうように努力したいと思う。

## 協働することで実りある提言に

岡谷 侑晟 (教育学部4年)

Yusei Okaya



プロプロが2回目かつ4年生だったということもあり、「自己成長と他者成長」を個人目標に掲げ、自身の知見を生かしてチームメンバーの飛躍に貢献できればよいと考えていたが、実際は私自身も学んだことが大変多い期間になった。ニュース・リテラシーのテーマは想像以上に複雑なものだった。しかし様々なバックグラウンドを持つメンバーや、深いメディアの知見をお持ちの読売新聞の方々と協働することで、個人的にはよい提言ができたと感じている。またネットメディアが普及する中での新聞の役割を実感することができた。

## 「ほうれんそう」の重要性体感

小野 彩夏 (法学部1年)

Ayaka Ono



私は「書き手の意図を意識する」という感覚が、本ワークショップ参加前には無かった。だが、ニュース・リテラシーについて、専門的な知識を有する方々から多くを学ぶ中で、情報があふれた現代でフェイクニュースに惑わされないために、情報の中の意図を考えるように変化した。また、グループワークでは多角的な意見を取り入れることができる反面、小さな事柄でも受け取り方の違いを生まないよう、報道相を欠かさないことの重要性を体感した。

## アイデアまとめる難しさ痛感

上野 詩織 (教育学部2年)

Shiori Ueno



ニュースとは何か。メディアとは何か。それらを上手く活用するにはどうしたらよいか。身の回りは情報であふれているのに、ここまで真剣に考えたことはなかった。加えてプロの記者の指導を受け、新聞の面白さにも気がついた。提言発表に向けて、グループでの会議を重ねる中、自身の課題も見つかった。活動期間中は、自分の中からアイデアを生み出す難しさ、それを言語化することの難しさ、一つの形にすることの難しさを痛感した。プロプロでの経験を今後に生かし、成長していきたい。このプログラムに関わってくださったすべての人に感謝したい。

## 社会で求められるスキル学べた

青柳 孝信 (教育学部3年)

Takanobu Aoyagi



一つの目標に向けて長い時間をかけてグループ内で議論し、何度も精査を重ね、結論へと導くことは、時には難しく感じることもあったが、達成感があった。メンバーからの意見は、毎回自分自身が気づかなかった点を指摘してくれたこともあり、大変刺激になった。ターゲット層を意識し続けること、相手に効果的に伝わるようにすることなど、社会で求められるスキルを学ぶことができた。最近も国内外で情報を巡るトラブルが頻発している。様々なメディアから情報を得て発信する前に、鵜呑みにせずに考える姿勢を持ち続けていきたいと感じた。

## 協力する能力鍛えられた

沈 意境 (政治経済学部3年)

Yijing Shen



今回のプロプロではメディア・リテラシーが教育現場で展開する現状と課題について深く考えさせていただいた。とても貴重な体験だったと思う。2か月のグループ活動も他の人と協力する能力を鍛えることができた。また、模擬記者会見に参加し、執筆した原稿を読売新聞の記者から添削していただいたことも勉強になった。マスコミ業界を志望しているが、現場で数十年経験を積んだ記者の意見はとても参考になった。プロプロを経験したことで記者になる志望を固めた。これからも、メディア・リテラシーの普及や取材活動に向けて努力したい。

## がむしゃらに行動する中で成長

平塚 絢子 (文学部4年)

Ayako Hiratsuka



気づき・疑問・驚きの連続だった。ニュース・リテラシーの定義をすぐに言える方が何人いるだろうか。私自身も答えられなかった一人であり、ニュース・リテラシーとは何かを探りながら考え続けた。チームメイトと意見が違ったり思うように進まないこともあったが、その分発見が多かった。考えの枠組みを外すこと、突撃インタビューしてみる……とがむしゃらに行動する中で少しでも成長できたように思う。貴重な機会を下さった読売新聞様と大学、そしてチームメイトの皆様、ありがとうございました。

## さらなる学びへそして社会へ

荻原 里砂 教育連携課課長



ニュース・リテラシーは、学生たちにとって、今を、そしてこれからの生きの中で重要かつ必要不可欠な要素です。今回は「ニュース・リテラシー」とは何か？という問いから始まり（その先何度も考えることとなりました）、さらにそれを広めるには誰を対象にどのように進めるか、学生たちは考えに考え抜いた2か月間でした。

正解のない課題に真摯に向き合い自分たちの納得のいく提言にまとめあげの中で、チームで取り組むことの難しさと喜び、自分の考えを言葉にして他者に伝えることの大切さと難しさ、読売新聞社や講師の方々からいただいた最新かつ実践的な知識・知恵・価値観等、身をもって触れることのできた濃密な時間となりました。

学生たちにとっては全てが納得のいくプロセスや結果ではなかったかもしれませんが、それをこれからの早稲田大学での更なる学びや学生生活の新たなステップにつなげるこそが、何より大切なことと捉えています。

今回出会った厳しくも温かい読売新聞社や講師の「プロフェッショナルズ」の方たちとの交流を通じ、社会には仕事に対し情熱を持って真摯に向き合っている素敵な大人たちがいることを知り、社会へ出ることへの期待や希望をもち、また自分もその一員となるべく準備をすすめる決意をもつことが本ワークショップの目的であり、今回、十分に達し得ました。読売新聞社の皆さまには惜しみないご尽力をいただき、誠にありがとうございました。

## 回重ねるごとに精度高く

下田 隆博



学生たちは答えのない課題に対して、学部もバックグラウンドも異なるメンバーでチームとして1つの結論を出す難しさ、回を重ねるごとにチームワーク力や議論の精度が増していくことの楽しさなど、多くの学びがあったと思います。

このような機会をご提供いただいた、読売新聞社関係者の皆様、ありがとうございました。

## 新たな学びや気づき

鈴木 紳



グループで学生各々が個性を発揮し、議論を重ね、提言を仕上げる様子を間近で見ることができました。

一つのテーマに対してじっくり、学部学年が異なるメンバーで考える機会は貴重で、学生は新たな学びや気づきを得たことと思います。

読売新聞社の講師皆様、大変貴重な機会をご提供いただき、誠にありがとうございました。

## 培われた力 実践を

駒野 亮太



「ニュース・リテラシー」という、あまり馴染みのないものに対してお互いの認識共有や定義付け、そこから学生らしいアイデアに結びつけていく工程を苦しみながらもやりきった学生たちに敬意を表します。ニュース・リテラシーを広める第一歩として、ワークショップで培われた「ニュースとの付き合い方」を今後も実践してほしいと思います。

## 自分にしか見えない風景大事に

田中 庸子



約2か月間、本当にお疲れさまでした。ワークショップ期間中、全速力かつ真摯に考え抜いた皆さんを大学職員として誇りに思います。皆さんにとってこのワークショップがどのような糧になるかは分かりませんが、応募時の志望動機と走り切った皆さんにしか見えない風景を大事にしていただければと思います。

## 学生生活の財産のひとつ

吉澤 安世



新聞への知見を深めつつ、本当にどの学生も回が進むごとに頭から煙が出るくらい真剣にメンバー同士で「ニュース・リテラシー」について話し合っていました。

そんな姿をそばで見守りながら、この普段の授業とはまた違った難しさを乗り越えた体験は、学生生活における財産の1つになったのではないかと感じました。

## 情報の取捨選択 胸に刻んで

東武雄 読売新聞教育ネットワーク事務局長



人間は日々、情報を取捨選択し、自分の中に取り込んで生きています。「どの情報を使い、捨てるか」という自分なりの物差しがあるはずですが、それを意識することは日常生活の中で、あまりないのではないのでしょうか。

SNSを通じて誰でも情報を発信できる世の中です。一方で、AIや画像技術などの発達により、「確かな情報」と「不確かな情報」を見分けることはますます難しくなりました。そのような現代で新聞社は日々、情報を取捨選択しながらニュースを報じています。取捨選択の物差しの一つは裏付けの有無であり、あらゆる手段を講じて情報の確度を高め、原稿に凝縮して報道しています。

新聞社が正確性の追求とともに、客観性や公平性を心がけるのはなぜか。それは、誤った「ニュース」は社会を混乱に陥れると思うからです。歪められたり、大げさだったり、悪意があったりする「ニュース」は人を傷つけかねない考えるからです。

今回のワークショップに参加した学生の皆さんは、ニュースを受け取る側として、その真偽を見極めることの大切さについて深く考えてくれました。あふれるニュースに接した時、友と頭を悩ませたほろ苦い記憶とともに「リテラシー」の言葉を思い出してくれたなら、これ以上の喜びはありません。

## 問い続ける人に

田中 孝宏 読売新聞教育ネットワークアドバイザー



ニュース・リテラシーは、ユネスコが提唱するメディア情報リテラシーの中の数あるリテラシーのひとつです。米国のトランプ前大統領とともに「フェイクニュース」という言葉が広まったのをきっかけに、ニュースの真偽を問い、ニュースとは何かを考えることの重要性が高まったことが背景にあります。米国では学校で、あるいはメールマガジンなどを通じて教育の一環に取り入れられています。

ニュース・リテラシーを身につけることで、ニュースを読み、学び、吟味する「よみとく力」を得ることができます。それは、情報の社会を生きるために、なくてはならないものです。プロフェSSIONALZ・ワークショップでは、その内容をわかりやすくどう伝えたらよいかという課題が学生の皆さんに投げかけられました。

わたしも学校に向いてニュース・リテラシーの授業を行っていますが、毎回、反省ばかりで、なかなか思うように伝えられずにいます。ニュースというものと面と向かうとその多様な価値に惑い、信念を揺さぶられます。それでも、ニュース・リテラシーを伝えなければならないという思いが消えることはありません。学生の皆さんもきっと同じような経験をしたことでしょう。

情報はテクノロジーの進化と共に千変万化し続け、その真の姿に出会うことが難しくなっています。そうした中で、ニュースはその価値を保つことができるでしょうか。解なき問いは、世の中に満ちています。それでも問い続けることを止めない人でいてほしいと願っています。







## What's News Literacy?

早稲田大学 × 読売新聞社 プロフェッショナルズ・ワークショップ

2023年5月発行

### 【発行】

読売新聞 教育ネットワーク事務局

### 【編集・制作】

東武雄 石塚公康 鈴木美潮 石橋大祐 田中孝宏 横山聡 橋本弘道

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 読売新聞東京本社  
☎03-3217-1967 Fax:03-3217-1968 Mail:ednet@yomiuri.com